



随筆丹下左膳

長谷川四郎

MISUZU・BOOKS

みすず・ぶっくす

隨筆 丹下左膳

長谷川四郎

みすず書房

著者略歴

1909年北海道に生る。法政大学講師

著書 「シベリア物語」「鶴」「阿久正の話」

「遠近」「より過ぎる者」ほか

訳書 メル「パスキエ家の記録」ジャ

ン・ベリュス「ソヴェト文学入門」アンリ・

アレグ「尋問」ギユヴィク「平和の味」ア

ルセーニエフ「ウスリー紀行」ほか

随筆丹下左膳

みすず・ぶっくす 1

昭和34年2月25日 第1刷発行 ©

¥ 150.

著 者 は せ がわ し ろう
 長 谷 川 四 郎

東京都文京区春木町 1-22

発行者 北 野 民 夫

東京都千代田区神田神保町 1-33

刷考 橋 本 伝 四 郎

区 株式 みすず書房
- 22 会社

同興印刷・鈴木製本

序

この本は今まで折にふれて書いた随筆・書評・報告・童話の類をよせあつめたものである。排列は時間の順序に従っていない。書かれた時期のわからないものが多いからでもあるが、また、すべては同時にわたしの中に存在しているようにも思われるからである。個々ばらばらにわたしから出ていったものが、こうして再び一堂に会したところをみると、どうやら、わたしもまた、僭称ではあるが、ロランがペギーについて言ったように、〈国勢調査のゆきとどいていない国民〉であるようだ。現在の瞬間において、自分の氣に入らないものもあるが、それもしめださなかった。ところで、全体の書名である。わたしは害虫を食餌とする批評家ではないし、まだ白頭翁でもないが、いまだに田舎者ではある。よって中の一編をとり、「新・棕鳥通信」としようと思ったが、〈新〉ときいて地下の観潮楼主人が冷笑するかもしれないし、棕鳥の棕の字は当用漢字にない。そこで、「車中三分間の対話」としようと思った。たしかに、車中にひもといて、ために目的駅を乗りこす心配のないことは保証するが、それにしてもいささか長すぎる。で、仮に巻頭の一編をとり、「随筆丹下左膳」とすることにした。要するに、なんでもいいのだ。この書物、曲り角で

なに出てくるかわからないようなものだが、そのいずれも、ロベたのおしゃべり
というところだろう。

著 者

目次

序（一九五九年一月）	1	アラビアンナイト	93
随筆丹下左膳	1	金達寿への手紙	112
新人発言	7	『現代フランス詩人集』	117
魚釣り	11	第二十七回メーデーに参加して	119
車中三分間の対話	20	帰郷者の憂鬱	124
『日本人』	24	メイド	148
新・椋鳥通信	29	『軍隊日記』	168
凶作基地	54	エネがディドンに……	169
リルケとロシア	76	隣人	174
詩人の綱渡り	83	猫	177
『ボロ家の春秋』	86	函館の魚石	180
楽泉園のロシア人	89	国民文化集会に参加して	192
		白鳥湖	202
		『パンのみによるにあらず』	213
		椅子の上のビールビン	216

雪

『文学の方法と典型』

ドンは静かに流れる

『日本文化の根底に潜むもの』

ヴォートカの周囲

わたしのモデルたち

白夜を見る

子どもたち

外国の詩と日本の現代詩

秘境ものをさぐる

SOPHISTICATED

クボクヒヤン選挙記

日本社会における詩人の運命

『大衆のエネルギー』

動物記

313 308 294 291 287 281 274 259 253 250 247 244 234 231 226

随筆丹下左膳

ぼくがはじめて北海道から東京へ出てきたとき、『丹下左膳』の作者林不忘は流行作家の第一人者で、ぼくはひとにひきあわされるたびに、「これは林不忘の弟さんでして」といわれたものだった。すると、相手はぼくのことなど二のつぎで、まず林不忘のことをいろいろとたずねたものだった。それが、去る者、日々にくとしで、現在ではときたま、「林不忘はあなたのお兄さんだったそうですね」ときかれる程度にかわってしまった。

一人三人全集というのを出した林不忘・牧逸馬・谷譲次こと長谷川海太郎は、ぼくより十歳年上の長兄だが、評判の『丹下左膳』をぼくは読んだことがないし、戦前的大河内伝次郎演ずるところの映画も見なかった。そして林不忘が死んでから二十年以上になる。ぼくは丹下左膳もその作者も世間から忘れ去られたものと思っていた。ところが、シベリヤから帰ってきて、パンかせぎにあくせくしていた或る日、新聞をひらいてみると、新版『丹下左膳』封切の広告がでかでかと出ていた。殺伐

の気風流行の兆ありというわけで、眉をしかめた批評家もあったように思う。まことに名作の生命は長いというべきだろう。ぼくは女房とふたりで府中の映画館へ見に行ったが、サムライたちが百万両の壺をラグビーのボールみたいにパスするところがぼくには面白かったし、女房には坂東妻三郎の丹下左膳が「さすがはおれの女房だ」と淡島千景のお藤にいうところがすっかり気に入ってしまった。彼女は今でも時々、このセリフをぼくの代りに言ってよろこんでいる。ぼくは大巨匠黒沢明氏が新々版・ミュージカルもの『丹下左膳』をとらないかなあ、と思うこともある。

丹下左膳が両眼をかつと見開いたり、みぎひだり自由自在の隻腕で、時には両刀をつかい、まるまると小さくふとって、めっぽう弱い、なんてことになったら、名作の生命もまた一段と長くなることだろう。

ところで、一人三人のうち、林不忘や牧逸馬よりも谷譲次が兄・海太郎にいちばん近いようにぼくには思われる。「話の泉」の渡辺紳一郎氏が兄と中学の同期だが、兄は父親に子供のときから仕込まれたせいもあって、英語がなかなかよく出来たということだ。弁論大会に英語で演説して先生をやっつけたりしたこともあるそうだ。応援団長で、いばっていたそうだ。あれやこれやで、かれは卒業間際に放校になり、東京へ出て、明大専門部法科を卒業したことになっている。それからかれはアメリカへ行ってしまった。

子供のころの十歳という年齢のひらきは大きなもので、ぼくは当時の兄の言動をほとんどおぼえていないが、東京の学校から帰ってきたとき、刑事の尾行がついてきたとかで、なんとなく家の周囲にそわそわとしたものがただよったことをおぼえている。東京でかれはアナーキスト大杉栄の家に出入りしていた。後年、かれの語ったところによると、大杉栄は安パイプをくゆらして籐椅子にどかりとすわり、刑事に自己の存在をおしえるため、外国語の本を大きな声でよんでいたということだ。一方、かれは島川という遠縁にあたる人のところへも行ったそうだが、これは江戸趣味の戯作者めいた人物で、どうも『丹下左膳』その他の林不忘ものは、源をたどれば、この人の薰陶もあずかっていたように思われる。

兄はなかなかダンディだった。当時流行の胴のキュッとした服を着て、アメリカへゆくべく函館の棧橋から連絡船に乗ったが、そのとき、町の篤志家で、巡査でもないくせに巡査みたいな制服をきた、少し足りない社会改良家が、救世軍的太鼓を叩いてやってきて、甲板上のかれにむかい——長谷川海太郎君、バンザイ！と叫んだことをおぼえている。思うに、成金と米騒動の時代であった。

東京本郷に追分館という下宿屋があつて、かれは流行作家になりかけのころ、ここに泊っていたが、なんだか知らないがゾロリとした和服を着流して、フトコロにはアメリカの三文雑誌をねじこんで、小唄の稽古などに通っていたということだ。

そのころかれは、どこかのカフェーの女給が好きになって、その手にキスしたら、おどろくべし、相手はびっくりして逃げていった、なんていう噂も耳にしたことがある。戦後風俗よりみれば、今昔の感にたえない、というところだろう。

『丹下左膳』の作者の若いころには、どうやら無頼なところがあつたようだ。アメリカへゆくとき、両親が心配して、ちょうど国へ帰るオールド・ミスの宣教師たち、道中よろしくたのむと、かれをたくしたのだが、かれはわざとこの女性たちをひんしゆくさせるような挙に出たらしい。このことはかれ自身も書いていたが、さもありなんと思われる。

ぼくの今は亡き父親はなんとか旅費を工面して、苦学ではあるが、とにかく勉強のためかれをアメリカへやったのだった。しかし、かれには初めからあんまり勉強の意志はなかったらしい。日本にいるアメリカ人のコンセツな紹介状をもってオベリン大学というのに入ったのだが、すぐ逃げ出してしまつて、料理店の給仕、売り子、雑貨屋の下働き、ベル・ボーイ、山火事専門の消防夫、農家の雑役夫などになって、方々うろついたことは、今はもう読まれそうもない谷譲次の作品『テキサス無宿』の話の種になっている。

もっとも、かれの死後、ぼくが押入れから出てきた古手紙を整理していると、アメリカへいって間もないころの、かれの手紙が見つかった。それには、家にのこし

てきた社会主義や法律関係の書物（その中にはエンリコ・フェリの名もあったが）をすぐ送ってくれ、頭がふらふらになるまで読んでやる、なんて書いてあった。アメリカ時代のかれにはまだ社会主義的な傾向があつて、IWW（世界産業労働組合）にはいい、少しばかり組合運動もやったらしいが、要するにこれはかれの本領ではなかったようだ。

かれは手紙をたいがい英語、というより米語で書いたが、そのなかに何枚かの絵葉書があつた。これは日付を追って発信地がちがっていて、ニューオルリーonz、ヴァルパライソ、シドニー、メルボルン、それから急にホンコンという工合だった。ニューヨークからの手紙には――ぼくは目下、ホット・ドッグの呼び売りをやっている、と書いてあり、当時、ホット・ドッグとはなにか見当のつかなかった亡父は、辞書をくつて、やっとそのなんたるかを知り、暗然たる顔をしたことをおぼえている。

当時、ぼくは中学の三年生だったが、或る日、学校から帰ってみると、家の前に半ズボンをはいた、陽にやけて真黒な顔をした、背の高い異様な若者が立っていて、ぼくに握手を求めてきたが、これがアメリカから帰ってきた兄だった。かれのトラシクには、トウモロコシの軸でつくった、かの有名なマッサー將軍がミズリー艦上でくわえていたようなコーンコブ・パイプと、水夫などの着るジャーシー・シャ

ツと、水夫帽が一つ入っているだけだった。こんな恰好で息子が帰ってきたことに、父親は不満で、父と子はなにやら言いあらそっていた。もとより兄もアメリカへまたゆくつもりだったが、ますます勉強のつもりなどなかったろう。

——またアメリカへいつて、なにをするつもりだね。

——アメリカ？ いや、ぼくはアラスカへゆくんだ、サケをつかまえにね、とかれはもちまえの、両親を不安ならしめる、いたずらくさい微笑を浮べて、言ったものだった。

ニューヨークから火夫として乗組んだ船が、電報一本でどこへゆくかわからない不定期貨物船で、こいつが南米から濠洲をまわり、ホンコンから大連へ寄港したとき、そこで脱船して、朝鮮まわりで家へ帰ってきた、というかれの話であった。

太平洋戦争のおこる前に、ぼくもしばらく大連の波止場に近いヘヴォルガ亭という居酒屋の二階に住んでいたことがあるが、ここは雑多な水夫のたちよるところで、ぼくはかれもまたこの店でビールなど一杯のんだのではないか、と考えたものだった。

かれの再度のアメリカ行は実現しなかった。というのは、そのころ移民法の改正がアメリカの議会を通過して、アメリカ大使館はかれのパスポートに査証を与えなかったからである。こんなわけで、東京にぶらぶらしているうちに、かれは文章な

ど書いて売り出し、ついには『丹下左膳』をつくりあげることになったのである。多くの日本の現代作家のように、かれも文才なるもので書きまくる人だった。かれはこの文才を豊富にもっていたから、電話で新聞小説のつづきを口述するなんてこともできたんだろう。それにしても、過去形で——林不忘はお兄さんだったそうですね、と言われるたびに、ぼくは少し残念だ。かれが生きていたら、ぼくの身边はさらに一段とにぎやかだろうから。

新人発言

かりにぼくが作家とすれば、作品以外に自分を語る場所はないようだし、何にせよ課題について書くことは生来、苦手なんだが、なんとか答案を作ってみる。まず、ぼくはどういう作家になりたいのかと、自問してみたが、結局、御名答は浮ばなかった。なにになりたいかという質問は、子供の時からおなじみだが、いまだにぼくをまごつかせる。なるようにしかならないし、なるものになりたいと言いたくなるくらいだ。ぼくは文学が好きだったが、作家になろうとは思わなかった。それが今

は新人などと呼ばれており、多分、鬼が何処かで笑っていることだろう。これからのことは未知数だが、とにかくぼくは見たものきり書けないから、さしずめルポルタージュ作家などが第一志望にいいようだ。といって、ルポルタージュを釣りに行って、必ずルポルタージュをつりあげてくるような、そんな器用なまねはできそうもないから、落第の公算が多い。

かえりみるに、むかしからぼくは、残念ながら、自分のなりたかったものになつたためしがないのだ。こんどだってあやしいものだ。かまわない。サイコロをふつてみよう。ない目は出ないにきまつている。

*

新人とはなにかと、ぼくはつらつら考えてみたが、多分、無数にいる作家志望者の中から、幸か不幸か、文壇ジャーナリズムの圏内にそこはかとなく出沒し始めた連中のことなんだろう。レッテルはなんだって構わない。仕事にはかわりがない。こつこつやるつもりだ。新人、新人というけれど、満で四十と三つだ。もともと花ムコのがらじゃない。もちろん萬年文学青年で結構だが、おもとみたいに応接間のかざりものにはなりたくないね。旧人にもなりたくないね。まあ、なりたくないものにならないように用心しろ、と自分にとくと言いきかせておこう。

抱負を語れというのにはいささかまいる。あやしげな設計図ならひけないこともないけれど、そんなものは見たってくそ面白くもないだろう。家はいきなりぽかりと作って見てもらいたいと思っっている。もっとも、バラックだけれど。それも、なかなか設計どおりにいったためしがない。ただ方法は素材に即応すべしという棟梁のおしえは守っているつもりだ。だから方法はその都度なんとか工夫しよう。われわれの仕事は、一切合財自分で見つけ出したり、自分の中からつかみ出したりしなくてはならないのだが、これにはそれぞれの時間があるし、どうも、出たとこ勝負みたいなところもある。

こんどはどんなものが出て来るか、いろいろやっているうちに、だんだんはつきりするだろう。シベリヤ物は書いたし、満洲ものは書いたし、今度は東京物だと声がかかる。ぼくはもっと方々旅行して、いろいろな人々にも接し、いいモチーフを見つけないかと思っっているのだが、計画の反古ばかりぎっしりつまった架空のお倉があるそう。な。ともあれ、ゆっくりいそごう。

*

さて、お立合い、などと言うのは、ぼくではない。ぼくは群衆の一人で、それも、うしろのほうで、せのびしている一人なんだ。

音楽についてぼくは全く無知だが、音楽は大へん好きだ。ぼく然とした話だが、ぼくは音楽のような作品を書きたいものだと思っている。音楽のように始まって音楽のように終る作品だ。主題のメロディーがいつも何処かで鳴りひびいている。そのメロディーが問題だが、それはむこうのほうからいきなりこちらをつかむものでなくてはならない。ぼくは作りたい——しかし作るというのは発見するというのだ、ほとんどシノニムである。模倣すべき傑作をこれから探しにゆこうというのだ。やかましいとばかり、スイッチを切られることも必要である。

*

お前の文学観はいかにあるか、などときかれると、ぼくはまごまごするだろう。時間いっぱいかかって短い答案をやっと書き、提出するとき、またゴムで消してしまふことだろう。頭のやつがわるいのだ。しかし鼻はそうわるい方ではないと自負している。食えるものと食えないものぐらいはかぎわける。味覚は鈍感だが、栄養はとらずばなるまい。

宮沢賢治はぼくのきらいな詩人だけれど、ぼくは内心、彼がうらやましくなくともない。何故なら、ぼくは将来、中学校の教科書に入れられるような文章が、書きたいからなんだ。